



アジアはどうなって いくのか？

服部 民夫

(大学文学部教授)

第二次世界大戦以降の東アジアでは日本を初めとして、それを追いかけるように台湾・韓国が急速経済成長を果たし、その後を中国が追うという地域全体の経済成長が見られました。このような成長がどのようなメカニズムで起こり、それがそれぞれの社会にどのような変化を引き起こしたのだろうか。これが私の研究テーマです。このテーマを現在は日本と韓国とを中心に見ていこうとしています。このようなテーマは開発経済学でも取り扱っていますが、そこには社会変化という観点が弱く、社会学では経済成長という視点が弱いので、私はこれを「開発の社会学」と呼ぼうと思っています。

このようなテーマに関心を持ったのは、大学では社会学を専攻し、アジア経済研究所（以下ではアジ研といいます）という経済学者が多数いる研究所で研究を続ける機会を与えられ、留学中に朝鮮社会史の大家であるハーバード大学のエドワード・W・ワグナー教授に親しく、指導を受けた僥倖だと思います。

アジ研に研究員として入所した当初、私の研究関心はむしろ社会学そのもので

した。当時は家族における資産の継承、つまり相続という現象に家族構造との関連で関心を持っており、七〇年代末にソウル大学に留学した際には日韓の家族構造を比較するために、韓国の歴史資料を漁っていました。そこで経済成長を先導していた「財閥」に、家族との関連で関心を持ったことが経済の方向に少し舵を切ったきっかけでした。韓国「財閥」の成長を考える上で政府の政策は押さえなければならぬポイントですし、それを理解するためには開発経済学を理解しなければなりません。経済学に大きく舵を切ったのはそのためです。しかし、その時期にも社会学における課題の中心である「人間」への関心は途切れませんでした。それが後に政府と産業界を繋ぐ人間関係のネットワークに関する研究に関心が広がり、その基礎付けのための朝鮮朝時代の権力ネットワーク分析に連なります。

しかし、アジ研での研究の中心は韓国の経済発展メカニズムの解明にあり、八〇年代の後半には研究所の同僚たちと「組立型工業化仮説」を提出しました。そ

の後、この研究は同じように経済成長を遂げた台湾との比較に発展します。九〇年代に入り、やはりアジ研の若い同僚たち（正確には元同僚です。その頃私は東京経済大学に奉職していました）との共同研究で大企業中心の「韓国タイプ」と、中小企業のネットワーク中心の「台湾タイプ」という類型を抽出し、そこにおける産業政策、技術蓄積の様式の違いに言及しました。私たちはその違いが韓国と台湾の社会構造の違いにも由来するのではないかと考え、その点を明らかにすることに一定の程度成功したと考えています。

最近、これまでの研究をベースとして経済成長とそれに伴う社会変化のあり方に欧米と東アジアでは違いがあるのでないか、ということが中心的な関心になってきています。グローバル・スタンダード、市場化といった言葉が飛び交い、日本や韓国の企業もそれに適応しようとしている今、その流れに抗うような言い方ですが、経済成長が始まる前の社会構造が異なり、また成長の経路が異なったそれぞれの社会において、欧米の（正確

には米国の）論理一色に他の社会が染め上げられるものだろうか、いや、徐々に近似していくかもしれないが、基本的に多様性として理解すべきではないのか、と考えています。日本や韓国といった既にある程度成長を遂げた社会は、欧米式をかなり取り入れてもやっていけそうですが、この論理はその他の南アジアや中東、アフリカなどの発展途上国には厳しすぎるのではないかと私は思うのです。

「近頃の若い者は」と言うほどの年齢に既に私も達してしまっただけですが、学生諸君の関心領域は随分狭くなっているように思います。確かに、いじめや少年非行、家族崩壊や学級崩壊など、日本の社会は多くの問題を抱えています。これらの問題は極めて重大な問題であることは言うまでもありませんが、現在飽食の国である日本が、かつては貧困にあえぐ途上国であったこと、そこから経済成長を遂げて現在のような社会を作り上げてきたこと。世界に目を転じると成長過程にある社会があり、いまだに貧困にあえぐ社会が数多くあることを知り、それ

らの社会が「真の意味」で豊かな社会になるために私たちは何ができるのか、といったことを学生諸君が考える契機となるような授業をやっているつもりです。今後も研鑽を積みながら講義を続けていきたいと思っています。かつては日本がそうであったように、変化や成長に目を輝かせている人々の存在から、日常性に埋没し、視野狭窄に陥っている私たちが学ぶものは本当に多いと思うからです。



マイスター・ エックハルト研究

中山 善樹

(大学文学部教授)

ケルン大学トマス・アクイナス研究所にフンボルト奨学生として留学してから、早いものでもう十年以上が過ぎてしまった。中世ドイツの特異な思想家エックハルト（一二六〇—一三二八）の研究のために留学したのだが、この留学は私の研究にとって決定的意味をもつものであったことを最近になって感じている。トマス研究所を選んだのは、ここでは、アルバート・ツインマーマン教授の主宰の下で、エックハルトのラテン語著作の批判的校訂版が編纂されていたからであった。まだ私が大学院を出て間もない頃、二十数年前のことになるが、その頃は、日本の中世哲学研究者でエックハルトのラテン語著作に注目している人は殆どなかった。エックハルトの本領はドイツ語著作にあるのであり、ラテン語著作は難解なばかりで、あまりおもしろくないということになっていった。私もご多分にもれず当初はドイツ語著作に魅せられ、確かにその詩的で流麗な表現に感嘆したが、哲学思想としては、概念が曖昧で、飛躍も多く問題が多いと悩んでいた。エックハルトというと、今でも、こういう

風に思っている人が多いと思う。ドイツ語著作は説教と講話からなり、しかも聞き手も尼僧や一般信徒であるから、これもやむを得ないかもしれないと考えた。

そこで学問的著作であるラテン語のほうはどうか、ということ、大きな期待をもって『パリ討論集』から調べ始めたところ、「神は存在ではなく、知性認識である」という命題から始まり、これはまたとつともなくおもしろいものだった。

テクストの編纂者B・ガイヤーも高く評価していることを知り、これはラテン語著作を全部徹底的に調べなくてはならないと思うようになった。ひよっとしたら、エックハルトの真骨頂はラテン語のほうにあるのではないかとこの予感がした。

そこでまず、『パリ討論集』についてトマスの『神学大全』も参照しつつ、論文をまとめ、中世哲学会で発表することにした。そうこうしているうちに、時期がよかったのだろうか、各方面から、ラテン語著作の翻訳の依頼がきた。『創世記注解』、『ヨハネ伝注解』をはじめ、多くのラテン語著作の翻訳だった。私は即座に引き受けて、これを機会に、これらの作

品を子細に調べてみようと思った。エックハルトのラテン語は難解だったが、毎日少しずつ訳していった。そうこうしているうちに、だんだんと自分なりのエックハルト像ができあがってきたが、それは従来の「神秘主義者」エックハルトというドイツ語著作にもとづく既成のエックハルト像とはずいぶんかけはなれたものだった。当時は九州の地方大学におり、その停滞した雰囲気も手伝って、今ひとつ自分のエックハルト研究が正鵠を得ているのかどうか自信が持てないでいた。

私はこのような状態から脱却するために、エックハルト研究の本場のドイツに留学しようと思った。そのためにまず膨大な申請書類をドイツ語で作成し、フンボルト財団に送った。私の申請は予想に反して一回で通り、ケルンに行けることになった。受け入れ先のトマス研究所はビルの上階にある小さなものだった。しかしツインマーマン先生は予想通り、温厚で篤実な学者だった。ある時、ツインマーマン先生に、長らく分からないままになっているテキストの中世ラテン語の

かなりの数の箇所を、質問してみた。なかには、即座に答えられるものもあったが、多くの箇所については、先生も難渋され、「このような問題は静かなところで長い時間をかけて考えなくてはならない」と言われた。私はなぜか安堵した。

先生は後に、フンボルト財団宛の私についての報告書で、私の中世ラテン語の読みが的確なものであることを述べて下さった。こうしてほぼ二年間にわたったドイツ滞在を終えて、帰国した。最大の成果は多くのドイツ人研究者と交わり、自分の研究姿勢にもいくばくかの自信をもつことができたことだった。帰国してからは、今まで草稿ということに残していたエックハルトの『ラテン語説教集』に取り組むことにした。草稿ではあるが、この作品が極めて高い水準のものであることが分かったからである。今回は、研究篇をつけ、詳細な注もつけることにした。これには、私なりに、トマス研究の成果も最大限に盛ることにした。身辺は多忙を極めていたが、この多忙な学務の間をぬって、テキストの翻訳、注の作成、解説論文の執筆等、寸暇を惜しんでいそ

しんだ。そのおかげで、昨秋ようやくすべての作業が終わり、『エックハルト、ラテン語説教集―研究と翻訳―』と題して創文社から刊行の運びとなった。

こうして振り返ってみると、外国人を含めて、今まで実に多くの師友の方々にお世話になったことに、感謝の念を新たにしている。これらの人たちの友情なくしては、私の研究は途中で挫折していたことだろう。その間、エックハルトは私にとっていつの間にか、学問の師のみならず、信仰と人生の師になっていた。今は、健康の許すかぎり、これからもエックハルトのラテン語著作の研究を続けていきたいと希っている。



『エックハルトラテン語説教集―研究と翻訳―』
中山善樹 訳註（創文社、8,000円）

私の研究の歩み



中川 優

(大学商学部助教授)

私の専門分野は、広く言えば管理会計ということになる。管理会計とは会計の中でも会計情報を企業の外部者（株主、取引先、債権者等）に公表するための財務会計とは異なり、企業内の経営管理のための会計である。したがって、会計原則や商法等の法的規制を受けることなく、各企業がそれぞれの経営管理目的に応じたシステムを持つことが可能である。とはいっても標準化されたテクニクは、管理会計という学問の体系と実務との相互作用の中で、存在している。

しかし、このような実学的世界である管理会計も約十年前程までは「停滞期」であったと言われていた。それは、アメリカの管理会計研究者であるジョンソン（T. Johnson）とキャプラン（R. Kaplan）が一九八七年に出版した著書中で指摘したものであった。彼らは、管理会計研究においては管理会計研究者の理論と企業の実務の間に明らかなギャップが存在し、現在の管理会計研究は、実務に対して貢献していないという指摘であった。

この著書が大きな転機となり、多くの研究者が先進的な実務に目を向けるよう

になり、企業を訪問してインタビュー調査を行い、その結果に基づいて研究を行う、ケース研究やフィールド・スタディという研究のスタイルが、多く登場するようになった。ちょうど、このような管理会計研究の一大変革期に院生、そして研究者へと時を過ごした私は、ある意味ではラッキーであったし、ある意味では、大変な時期を過ごした。

私の研究の出発点は、院生のころに始めた情報システムと管理会計との学際的な研究であった。管理会計は経営管理のためであるから、別の側面から見れば、経営管理者の意思決定を支援する情報システムとも言える。したがって、情報システムというのは、管理会計にとって非常に重要なツールだということになる。

もちろん、このテーマは現在でも私にとって重要な研究テーマの一つである。

現在、私の最も大きな研究テーマが、管理会計の国際化というテーマである。このテーマにたどり着いたのは、約七年前に、前任校でアメリカに在外研究の機会を得たからであった。その時に、同僚の一人が同じくアメリカで在外研究を行

っており、彼に付き添ってアメリカにある日系企業を訪問したのが一つの契機であった。折しも八〇年代末から九〇年代当初は、日本の製造業が好調で、その原因が日本的なマネジメントにあるとして、特に管理会計の分野では「原価企画」という、製品開発段階における原価低減の手法が、世界的に注目を集めた時期であった。もちろん、原価企画は今でもなお世界的に注目を集めている原価管理の手法であり、日本企業だけでなく、世界の有力企業が関心を示して、導入を行っている。

このような時期にアメリカに所在する日系企業を訪問する機会を得たために、いわゆる日本的なマネジメントや管理会計システムが、現地法人の中でどのように適応していくのか、ということに興味を持ち始めるに至った。

この種の研究は「国際経営」と呼ばれている経営学の分野ですで行われていたが、管理会計の分野ではまだまだ未開拓の領域であったし、管理会計というどちらかと言えば、ミクロ的な議論は国際経営の分野でも行われておらず、いずれ

にしてもフロンティア的な領域であった。そこで、それ以降私は、この分野の研究に取り組み始めた。最初は、実態を知ることが重要だと思い、アメリカに所在する日系企業に対して訪問調査を行った。

この種の研究は、調査に協力をいただける企業を探すがひとつの難関であった。ともかく、コネも何もなかった私は、住所録で企業の住所を調べ、一つ一つに手紙を書いて、訪問可能な企業を探した。手紙を書いても返事もいただけないような所もあった。しかし、このような作業を繰り返すうちに、訪問可能な企業を見つけては、夏休みや春休みのような長期休暇中に、アメリカへ出かけて行った。

そのお陰で今では、簡単な略図をもらえば、アメリカ中どこでも行けるような自信がついた。このような訪問調査の繰り返しにより、アメリカにおける日系企業の管理会計における問題点が、次第に明らかとなった。そこで、次のステップとして、アンケート形式による、大量サンプル調査を行うことにした。

これは、訪問調査により実態がある程度把握できたため、自分なりの理論的仮

説を大量サンプル調査により、検証したいという動機からであった。

幸い、昨年の三月からアンケート調査を行い、ある程度の数の企業から回答をいただき、貴重なデータを得ることができた。

現在はこれらのデータの統計処理とその解釈を行っているが、私自信の解釈では理解不能な結果も一部出ており、さらに研究をしなければならぬと思っている。日本企業にとって、国際化という課題は避けられないものであり、私のまだまだ未熟な研究を通じて、少しでもこの課題の解決に貢献できればと思う次第である。

外国人に日本語を教えるということ

丸山 敬介

(女子大学学芸学部教授)



日本語教師を始めたころ、外国人に日本語を教えているというところ、そんな職業があるのかといういろいろ聞いてくる人もいたが、そんなもの、自分だって教えられない、という人の方がむしろ普通だった。その時は別にむきになって言い返すこともないと思っただけだが、けれどもその内、外国人に日本語を教えるとはどういうことなのか、自分なりに悟ったような気になったできごとがあった。

当時勤めていた日本語学校で恒例のスキー旅行が催された。行き先は、信州志賀高原である。新人の教師だった私は、雪国出身だったことを見込まれ、その幹事をやるように言われた。宿とバスの手配をし、ボスターを作り、結局、十人あまりの外国人を集めて金曜日の夜十時頃、東京四谷の町を出発した。バスでの強行軍、早く寝るのが一番とウイスキーを飲みながら酔いを誘ったものの、何とか眠りについたのが夜中の二時過ぎだったように思う。ところが、七時前から外国人がうるさい。やれ白い山並みがきれいだの道路の両脇の雪の盛り上がりがすごいだの、もう少し寝かせておいてくれ

ないかと軽い怒りさえ覚えた。けれども、彼らにしてみれば、今このときをのがせば、一生、じかに雪など見る機会がないに違いなかった。参加者は全員東南アジアからの留学生であった。今は多少変わったが、当時、欧米人には日本人の方から寄っていった。誕生日、クリスマス、バレンタインデー、ゴールデン・ウィーク、彼らにはほっといてもイベントの約束ができた。しかしながら、若者たちが最も輝くその時々アジアの留学生には声がかからない。そこへ日本語学校が何かやるとなれば、彼らは喜んで参加するというわけである。

宿に着き、通らないご飯を無理に押し込んだ後、彼らのためにレンタルの窓口に行く。あらかじめ聞いておいたサイズにしたがって、靴とスキーを手渡していく。私は自分で自分の靴を履き、スキーをケースから取り出す。ところが、すぐ横から「先生、スキー靴って痛いですわ」と学生がいう。見れば、痛いはずである。左右が反対である。バックルが外に来るようにして履くのだと教えた後、いよいよゲレンデに出た。全員を並ばせ、スト

ツクの持ち方、スキートの履き方を説明して、彼らの準備が整うまで、私はスロープに目をやり、午前中のレッスンはあの辺りでやるとして、午後の自由時間には上の方で足慣らしをしようなどと思いをめぐらす。そして、いよいよ開始、目を付けていたスロープに向かって二〇メートルほど歩いたときである。

ふっと振り返ると、学生がだれもついてこない。何でついてこないのかというと、スキーを履いた足では歩けないのである。私は不思議でならなかった。歩くなどという動作は、右足と左足を交互に前後させ、それに合わせて左手と右手を前後させる。ただそれだけのことがなぜできないのか、どうしても解せなかった。

けれどもその時、私は日本人に教える国語教育と外国人に教える日本語教育の違いが自分なりにはつきりわかったような気がした。国語教育が豊かな表現力と感受性を通して生きる力を身につけさせることを目的とするならば、雪煙を舞いあげてかっこよくとか人よりも早くとか腰を落として足首を押しだすようにとか、それはいつてみれば国語教育なので

ある。日本語を学ぶ外国人はそれ以前の所にいるのである。スキーを履いて立つこと、歩くこと、リフト乗り場のスロープで滑り落ちないこと、リフトを止めないでちゃんと降りること……。それが、日本語教育の目的なのだとその時はつきり教えられた。

そのためには、例えば転んで起きあがろうとするとき、板は腰にどの程度近づけたらいいのか、ストックはどの程度体から離して雪に刺せばいいのか、膝は上に向けたらいいのかそれともスキーの先端の方に向けたほうがいいのか、それを客観的に知らねばならない。その際、自分にそれができることそれ自体はあまり重要ではない。知って、その内容をわかりやすく相手に伝えること、それが日本語を教えるという作業の根本である。

けれども実はそれが、大変な苦労を要する仕事なのである。あまりにも日常的すぎて意識のしようがない。例えば、日本には「とりあえず」というメーカーのビールがあると思っている外国人が結構多いのだが、じゃあ、この「とりあえず」の意味を改めて考えたとましてそ

れをやさしいことばで説明するとすると、簡単にいくだろうか。

あのゲレンデの朝から、十九年。これまで教えた外国人は約千五百人、その出身国は四十を超える。その間、数ばかりこなして教師としていつこうに成長しない私をしり目に、我が日本語教育は大きな転換を遂げた。すなわち、日本語の体系的指導から、現実の「場」の中におけることばの習得へという流れである。

「場」とは、話し手と聞き手の立場・話題・場面状況などである。同じ誘うにしても、単に「～ませんか」と言えばいいというものではなく、時と場合によってそれにふさわしい誘い方がある。その時と場合の中でことばを教えようと、今日の教師は腐心しているのである。もともと、それは日本人同士でも結構難しい問題で、その辺りに私が成長しない真の理由があるのかもしれない。

それにしても、あのときの学生たちは、南国の空の下で私の教えた日本語を使ってくれているのだろうか。



自立へのかけ橋 としての性の学習

小田切 孝子

(女子中学校・高等学校教諭)

性の学習の概要

高校二年生の保健の授業の中で、性の学習を一学期の後半に五時間行っている。導入として、同志社ゆかりの性教育のパイオニア「山本宣治」の紹介とその時代の中で、山宣の主張である「性を科学的に学ぶ事」についてふれ、性の学習の基本概念を学んでいる。その上で、七十年後の現在の若者の性意識と行動に目を移している。

主な授業内容は、一、女性の、男性の性のメカニズム 二、性交について 三、避妊について 四、STD (HIVを含む性感染症)。五時間の授業では、つめこみの学習をまぬがれず、悩むところである。これらの学習で、生徒に特に理解してほしい事は、自らの身体の主人公となるように、性器を含めた身体について科学的に理解を深めること。「男女の成り立ち」については、性器は発生初期では男女ともに相同組織であり、ヒトの原型はある時期までは、女になるべくその発育が進む。この事実を理解することは、男性優位社会の中で育ってきた彼女たちに

とって科学的な知識に裏づけされた男女の理解に繋がるものである。そして、マスメディアが一方的に流している、同性愛やジェンダーバイヤスについての差別的な取り扱いを正視する基礎的学習ともなっている。

性交についての学習は、男女の性のメカニズムの学びの延長線上にとりあげられる。男女の心のふれあいや、性欲とその年齢差を資料から参考に取り上げている。性交のテーマは他の教材に比して、個々人が大きなギャップを持っているのでその配慮が必要である。

避妊については、日本での性教育の遅れが、即、多くの若者の感染者を生み出している。雑誌や友人から伝えられる非科学的で間違った避妊法をそのまま信じている事例（たとえば、膈外射精を避妊法と考えることや、不適切なコンドームの使用等）がある。ここでは、各種の避妊法を具体的に学ぶ機会となる。しかしながら、机上の学習だけでは不十分であり、男女の関係性の問題が浮上してくる。ここが一学期の授業の中でポイントになる。

S.T.D.については、多くの若者にクラミジア等の感染増加が最近の特徴である。S.T.D.に関する正しい知識が男女共に必要であり、ここでも、「自分だけが良ければ良い」や、「言い出せない」等、互いの関係性の課題が出てくる。日本では、若い世代に限らず、既婚者にもあてはまる課題となっている。

これらの基本的な学習を終えて、夏休みには、次のような宿題を課題としている。一、性に関する読書と感想文 二、基礎体温の測定と記録。一の感想文でよく書いているものを集めて文集を作り、学年生徒へ配布している。

グループ学習・発表

三学期は、教師からの一方通行の授業ではなく、生徒によるグループ学習・発表を行っている。これは、生徒自らが学び、また、共に学び合う機会である。

次は、九九年度生が選んだテーマの一部である。

- ・ダイエット
- ・女性の心と身体
- ・中絶
- ・眠りについて
- ・月経につ

いて ・性犯罪 ・たばことアルコール ・売買春 ・性情報 ・ペットの言い分

これらのテーマの中で、妊娠、出産、中絶、S.T.D.に関するテーマを選んだ班については、一つだけ要望を伝えていた。それは、助産院や産婦人科への校外学習の勧めである。その際、他のテーマを選んだ者でも、この機会に是非行ってみたい。生徒も歓迎している。

この取り組みのねらいは、女性は一生の中で産婦人科との関わりを必ずとっているほど持つが、若い世代はその門はくぐりにくく、未知の世界であることを考え、この機会に訪問学習によって、産婦人科や数少ない助産院が、実は身近な存在としての医療機関であることを知ってもらいたいのである。訪問当日は、希望者にはズボンを着用してきてもらい、産婦人科では処置室、分娩室への入室を希望し、分娩台にも上がってもらおう。毎年、助産婦さんや、看護婦さんには生徒からの素朴な質問にも丁寧に対応していただき、学校では得られない貴重な学習の場になっている。これらの実践は、

助産院と産婦人科の生徒受け入れの協力があつてこそ成立する。後日に生徒の感想を郵送して、交流を継続している。

生徒の性についてのアンケート調査で学内外の諸先生に多大なお世話を頂いている（この場をお借りして深謝します）。生徒が同志社中高、および大学、女子大に出かけて、生徒、学生の意識調査に広くご協力頂いているが、大学生までの広範囲な年齢層を視野に入れての調査ができることについて、同志社の一貫教育の良さを実感している。

さて生徒の班学習の成果である発表方法であるが、プリント作成、模造紙展示は勿論であるが、寸劇も登場する。各人の調査レポートを読み上げるだけの単純な発表方法は避けるように勧めている成果でもある。どの様な発表方法をとるのかもグループのチームワークと創意が試されるが、これからの若者にとってのよいプレゼンテーションの訓練は貴重な経験になる。こうしたグループ学習は生徒の主体性と生徒相互間の交流を深める上にも欠かせない学習形態である。